KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

雑談で話し手はどのように聞き手との間に共通基盤を構築しているか（3）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学留学生別科 公開日: 2025-04-10 キーワード (Ja): 日本語教育, 会話分析, 自然会話コーパス, 共通基盤, 共通認識 キーワード (En): 作成者: 西郷, 英樹, 清水, 崇文 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学, 上智大学言語教育研究センター/大学院言語科学研究科
URL	https://kansaigaidai.repo.nii.ac.jp/records/2000338

関西外国語大学留学生別科　日本語教育論集 34 号　2024

雑談で話し手はどのように聞き手との間に共通基盤を構築しているか（3）

西郷　英樹
清水　崇文

要旨

西郷・清水（2022）、同（2023）に続き、雑談において日本語母語話者が聞き手との間でどのように共通基盤を構築しているかを調査・分析した結果を報告する。

共通基盤の内容を、話し手と聞き手が共に知っている場合、「ジャン」系が最も多く使用され、「ヨネ」系、「デショ？」系が続くことがわかった。「ヨネ」系は会話ですでに言及された内容を基に新たな話題を展開する際にも使用されることが明らかになった。また、認識の共有を強調する形式（例：「んでしょ？」）と、単なる確認を行う形式（例：「でしょ？」）の違いが会話の流れに影響を与えることも示された。

一方、共通基盤化する内容を聞き手のみが知っている場合は質問形式を用いて情報確認や前提共有を行い、話題展開が図られていることが明らかとなった。

本研究の知見は、日本語学習者が自然な会話を展開するための教材設計に役立つと考えられる。

【キーワード】日本語教育、会話分析、自然会話コーパス、共通基盤、共通認識

1. はじめに

本稿は、西郷・清水（2022）、同（2023）の続編である。筆者らは、達成すべき明確な目的を持たない、いわゆる「雑談」と呼ばれる目標志向性が希薄な会話において、日本語母語話者がどのように聞き手との間に共通基盤を構築しているかを調査した。本研究では、『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2020 年度版』に収録された 21 件の会話データ（総時間 485 分 34 秒）から、話し手の共通基盤構築の意図が認められる箇所を 543 例抽出し、分析を行った。なお、本研究における

「共通基盤構築」とは、話し手が次に展開したい内容の前提を聞き手との間に形成する行為を指す。

西郷・清水（2022）、同（2023）では、話し手が共通基盤にしようとした内容のうち、全体の72.4%を占める［共通基盤の内容を話し手のみが知っている場合］（393例）について分析結果を報告した。本稿では、以下の 2 つの場合について新たに分析結果を提示する。

・共通基盤の内容を話し手と聞き手が共に知っている場合
・共通基盤の内容を聞き手のみが知っている場合

本研究の背景や目的、さらに使用した会話データや分析方法については、西郷・清水（2022）を参照されたい。

2. 共通基盤の内容を話し手と聞き手が共に知っている場合

話し手の共通基盤構築の意図が認められる543例のうち、25.8%にあたる140例が［共通基盤の内容を話し手と聞き手が共に知っている場合］に該当した。これらの事例を分析した結果、内容は 7 つの系統に分類できることが明らかになった（表 1 参照）。また、これらすべての系統について、男女別の使用頻度に大きな偏りは認められなかった。

表 1 共通基盤の内容を話し手と聞き手が
共に知っている場合の言語形式・ストラテジー

系統	例数	言語形式・ストラテジー全体に占める各系統の割合（%）	男女別各系統の例数		系統別例数の男女比(%)		男女別各系統の内訳(%)	
			男	女	男	女	男	女
ジャン	104	74.3	52	52	50.0	50.0	74.3	74.3
ヨネ	13	9.3	5	8	38.5	61.5	7.1	11.4
デショ？	9	6.4	5	4	55.6	44.4	7.1	5.7
ノダヨネ	8	5.7	4	4	50.0	50.0	5.7	5.7
ンデショ？	4	2.9	2	2	50.0	50.0	2.9	2.9
ンジャナイ？	1	0.7	1	0	100.0	0.0	1.4	0.0
ケド	1	0.7	1	0	100.0	0.0	1.4	0.0
計	140	100	70	70	50.0	50.0	99.9(1)	100

本稿では、最も使用頻度が高かった「ジャン」系を中心に、表中に示された各系統について考察を行う。ただし、1 例のみの出現にとどまった系統（「ンジャナイ？」系

および「ケド」系）については、一般化するには例数が不十分であるため、考察の対象から除外する。

2.1 「ジャン」系

全体の 74.3%（104 例）を占めていた「ジャン」系の内訳は、「じゃん」[(2)]が 94 例、「じゃん」の「じゃ」の子音が弱化した「やん」[(3)]が 6 例、「じゃん？」が 2 例、さらに「じゃん」の「ん」という音変化の元音が残る「じゃない」「じゃない？」[(4)]がそれぞれ 1 例であった。

2.1.1 「ジャン」系の前にどのような内容が現れているか

話し手と聞き手が共に知っている場合（より正確に言えば、そう話し手が考えている場合）は、大きく以下の 3 つに分類できると考える。

① 論理的な帰結

「論理的な帰結」とは、論理的に導き出せる事実を話し手と聞き手が共有できる場合を指す。具体的には、「2×2＝4」のような基本的な計算結果や、「2×11×12＝264」のようにやや複雑な計算式も含まれる。これらは計算者の経験や状況に依存せず、正しく計算すれば誰にでも同じ答えが導き出されるため、共有されている内容と見なすことができる。本研究では、このような論理的な帰結も「既に知っていること」に分類する。

② 共有情報

「共有情報」とは、話し手と聞き手が具体的な経験を通じて明確に共有している情報を指す。例えば、大学の同級生が同じ授業を履修している場合、その授業内容や先生の名前、性格などの具体的な知識が該当する。このような情報は、社会全体で広く共有される一般常識とは異なり、特定の個人間の相互認識に基づき、その共有範囲が限定される。ただし、一般常識と共有情報の線引きは必ずしも明確ではない。本研究では、一般常識を広範な社会的共有を前提とした知識、共有情報を特定の個人間で形成される情報として便宜的に区別することとする。

③ 一般常識

「一般常識」とは、同じ文化的・社会的な背景を持つ人々の間で広く共有されている知識を指す。地域、世代、職業などの限定的な集団内で共有される知識もこれに含まれる。例えば、特定地域で有名な外食チェーンや職場独自の言い回し、学校特有のルールなどが挙げられる。この一般常識は、日本国内でも地域や集団により異なり、異文化間ではさらに大きな差異が生じる可能性がある。

「ジャン」系が現れている 140 例を分析の結果、上述の 3 つの分類に基づく割合（例数）は以下の通りであった。

① 論理的な帰結: 18.3%（19/104）
② 一般常識: 45.2%（47/104）
③ 共有情報: 36.5%（38/104）

本研究で分析した会話データにおいて、話し手が「ジャン」系を用いて共通基盤を形成する際、最も多かったのは「一般常識」の 47 例（45.2%）であった。次いで、「共有情報」が 38 例（36.5%）を占め、「論理的な帰結」は 19 例（18.3%）にとどまった。

まずは最も割合が高かった「一般常識」の例を紹介する。

2.1.1.1 一般常識

BTSJ-28[(5)]の直前では、話し手（JF009）が普段利用している駅前にコンビニエンスストアが 2 軒並んでおり、そのうちの 1 軒に接客態度の悪い店員がいるという話を聞き手（JF010）に伝えている。

261	238-2	*	JF009	なんかね、「学科名2」のね(うん)、一年の子が(うん)、そこ行ってね、なんかね、あーのー、お店の人に言わないと買えないようなやつあんじゃん。
262	240	*	JF009	なんたらドッグみたいの<とかさー>{<}。
263	241	*	JF010	<あー、うん>{>}うん。
264	242	*	JF009	あーいうのを買ったんだって。
265	243	*	JF010	うん。
266	244	*	JF009	そしたらー、無言で手渡されたんだって[「無言で」を強調して]。

BTSJ-28 「ジャン」系（一般常識）の例（会話番号 015）

261 行目から、話し手は大学の 1 年生から聞いたエピソードを話し始める。はじめに、1 年生がそのコンビニに行ったことを述べ、次に［店員に言わないと買えない商

品がある］という内容を「じゃん」で共通基盤化している。その後、「なんたらドックみたいのとかさー」と具体的な商品の例を挙げ（262 行目）、聞き手の「あー、うんうん」という理解を示す応答（重複発話）が続く。これを受けて、話し手は 264 行目で、［その 1 年生がその類の商品を購入した］という内容で話を展開させる。その後、このときの店員の態度についてのエピソードが語られる。

［ホットドッグや唐揚げのように、コンビニには店員に依頼しないと買えない商品があること］は、日本で生活していて普段コンビニを頻繁に利用する人々の間では広く共有されている知識、つまり一般常識にあたる。この例では、話し手はこの一般常識を聞き手との間で共通基盤化するために「じゃん」が用いられている。

2.1.1.2 共有情報

次に、「ジャン」系の中で 2 番目に多かった共有情報を共通基盤化した例を紹介する。BTSJ-29 の前では、話し手（JF009）が聞き手（JF010）に、実家から送られてくる荷物にまつわるエピソードを話している。話し手は、荷物にお菓子が入っていると普段お菓子を食べない反動で食べ尽くしてしまうため、お菓子を入れないでほしいと思う一方、入っていることをほのかに期待してしまう、と述べている。

511	478	*	JF009	<うん>{}、あたしもさー、寮にいたじゃん(うんうん)、中学校のとき。
512	479	*	JF010	うん。
513	480	*	JF009	だからー、仕送りが、仕送りっていうか、荷物たまに送ってくれるのよ。
514	481	*	JF009	そんときにねー、お菓子類ほとんど入ってなかったからねー(<笑い>)、すごかったよ。
515	482	*	JF009	インスタントの味噌汁と(あん)、インスタントの(うん)ご飯と(うんうん)、あとはなんかねー、服どぅ、服とか。
516	483	*	JF010	あーあーあー。

BTSJ-29 「ジャン」系（共有情報）の例（会話番号 015）

その後、511 行目で話し手は［寮に入っていた］という内容を述べ、「じゃん」を用いて聞き手との間に共通基盤を構築している。この発話に対して、聞き手の「うんうん」という応答が続き、この内容が聞き手にとって既知の情報であることが示される。その後、話し手は「中学校のとき」と具体的な時期を補足し（511 行目）、513 行目から共通基盤化した内容をもとに話を展開している。513 行目から 515 行目では、［たまに実家から送られてくる荷物にはお菓子がほとんど入っておらず、インスタント味噌汁やご飯、野菜、衣類といった実用的なものばかりであった］ことが語られる。

この例では、話し手と聞き手が共有している特定の情報（話し手が中学生のとき寮に入っていたこと）が、その後の会話内容を展開するため必要不可欠であることがわかるだろう。そのため、話し手はこの共有情報を会話のこの時点で聞き手に想起させ、その後の会話の共通基盤にする必要があったのである。

このように、聞き手に共有情報を想起させ、それを基に話を進めることで、会話はより親密かつ具体的なものとなり、聞き手との心理的距離を縮める効果があると考えられる(6)。

2.1.1.3 論理的な帰結

最後に、「ジャン」系の中で最も割合が低かった論理的な帰結が共通基盤化されている例を紹介する。

客観的帰結

BTSJ-30 の直前では、話し手（JF009）が聞き手（JF010）に、自身がペットボトル飲料の新商品について詳しいことを話している。

335	312	*	JF009	うちからね、なんか、弁当持ってきてるんだけどー(うん)、飲み物も一緒に持ってくると重いじゃん。
336	313	*	JF010	うん、<そうだねー>{<}。
337	314	*	JF009	<だから>{>}、買うのね、いっつも。

BTSJ-30 「ジャン」系（論理的な帰結）の例 1（会話番号 015）

その後、335 行目で話し手は［自宅で作った弁当を（大学に）持ってきている］という内容を話し手のみが知っている場合に用いられる言語形式「んだけど」（西郷・清水 2022）で共通基盤化している。直後に聞き手が「うん」と相槌を打ち、話し手はさらに［飲み物も（弁当と）一緒に持ってくると重い］という内容を展開し、その後「じゃん」を用いて共通基盤化を行っている。

弁当のみと弁当と飲み物では後者の方が重いのは当然の理であり、このような論理的な帰結は誰もが納得できる内容である。これを基に、337 行目以降で［飲み物はコンビニで買うことになるため、新商品について詳しくなる］という話が展開されている。

論理的な帰結の 19 例のうち、12 例は、この例のように、話し手の感情が関与しない客観的な帰結であった。一方、残りの 7 例は話し手の感情が関与し、一般的な思

考を持つ人であれば納得できると考えられる主観的な帰結であった。以下に、その一例を示す。

主観的帰結

BTSJ-31 の前では、話し手（JF094）が聞き手（JF095）にキャンプ場を探している話をしている。その中で、バンガローとテントを比較し、テントのほうが安いが、バンガローのほうが楽ではないかと述べている。

106	100	*	JF094	テントさー、彼氏の家、にあるんだけど<さー>{<}。
107	101	*	JF095	<うーん>{>}。
108	102-1	/	JF094	なんか借りる、とかさー、めんどいじゃん、,
109	103	*	JF095	そうだね。
110	102-2	*	JF094	後が。
111	104	*	JF095	多分ねー(うん)、掃除が大変だと<思う>{<}。
112	105	*	JF094	<そうそうそう>{>}、雨とか降ってもいやだしねー。
113	106	*	JF095	うん。

BTSJ-31 「ジャン」系（論理的な帰結）の例 2（会話番号 208）

106 行目と 108 行目で、話し手は［彼氏からテントを借りると、面倒だ］という内容を述べ、「じゃん」を用いて共通基盤化している。この［面倒だ］という論理的帰結には話し手の感情が関与していることは明白であろう(7)。その後、109 行目で聞き手が「そうだね」と同意を表明した後、話し手は「後が」と補足し、何が面倒なのかを具体化している。111 行目では、聞き手が「後が」の具体例として［(借りたテントの）掃除が大変だ］という内容を述べ、共感を示している。さらに、話し手は掃除が大変になる条件の一つとして［雨が降る場合］を挙げている（112 行目）。

このように、一種の掛け合い漫才のように会話が発展していくのは、テンポ良く雑談をする楽しさを示す好例であろう(8)。また、話し手が理由や状況に対する自己の感情を開示することで、聞き手が話し手に対して共感を持ちやすくするという効果もあると思われる。このことから、主観的な論理的帰結を用いた共通基盤化は、単に論理的に会話を進めるだけでなく、感情を共有することで話し手と聞き手双方の心理的距離を近づける手段としても重要な役割を果たしているといえよう。

以上、最も使用頻度が高かった「ジャン」系について考察を行った。次に、それ以外の言語形式について考察する。ただし、「ジャン」系以外の言語形式は例数が少なく、一般化には至らないため、少数の事例から見て取れる傾向を示すに留める。

2.2 「デショ？」系

話し手と聞き手が共に知っている内容を共通基盤化する際に用いられる言語形式の中で、2 番目に使用頻度が高かったのは「ヨネ」系であったが、ここでは 2.1 で考察した「ジャン」系と用法が似ている「デショ？」系（使用頻度は 3 番目）を先に考察することにしたい。

「デショ？」系には派生形はなく、すべての例が「でしょ？」[9]であった。以下に、その一例を紹介する。

BTSJ-32 の直前では、話し手（JM001）と聞き手（JM002）が授業での板書について話している。その流れで、教員が「板書を消す」と言った場面を題材に、話し手が学生になりきり「まだ書いていない」と一人芝居を始め、それを聞いた聞き手が笑っている。

387	373	*	JM001	黒板に書いた文字、消しちゃだめなんだよ。
388	374	*	JM002	なんで?。
389	375	*	JM001	あんねー(うん)、授業はー(うん)、あれ、授業ばん終わってー(うん)、で、黒板に板書残ってるでしょ?。
390	376	*	JM002	うん。
391	377	*	JM001	その板書をぱって見て、その、ろ、50分なり60分なり(うん)の授業を全部振り返れるような板書(うん)が、一番すばらしいんだって。

BTSJ-32 「デショ？」系の例（会話番号 001）

387 行目では、話し手が［黒板に書いた文字を消すのはよくない］という内容を述べ、388 行目で聞き手がその理由を尋ねている。389 行目で、話し手はその質問への返答として［授業が終わった後に黒板に板書が残っている］という内容を述べ、それを「でしょ？」で共通基盤化している。この［授業後に板書が残っている］という事実は、誰でも知っている一般常識であるため、「デショ？」系は話し手と聞き手が共に知っている内容を共通基盤化する際に使われる言語形式であることがわかる[10]。この共通基盤化に対し、聞き手は 390 行目で「うん。」と同意を示し、391 行目で話し手は［授業後に残った板書を見れば、その授業の全体像を振り返ることができる板書がよい］という内容で話を展開させている。

2.2.1 互換性からみる「ジャン」系と「デショ？」系

「デショ？」系は、今回分析したデータに関していえば、「ジャン」系と入れ替えても会話の流れに不自然さはないように見える。例えば、BTSJ-32 の 389 行目の「で、

黒板に板書残ってるでしょ？」を「で、黒板に板書残ってるじゃん。」と言い換えても不自然ではない。逆に、以下の BTSJ-31（108 行目）の「なんか借りる、とかさー、めんどいじゃん。」の「じゃん」を「でしょ？」に置き換え、「なんか借りる、とかさー、めんどいでしょ？」と言っても同様に違和感はないだろう[11]。

106	100	*	JF094	テントさー、彼氏の家、にあるんだけど<さー>{<}。
107	101	*	JF095	<うーん>{>}。
108	102-1	/	JF094	なんか借りる、とかさー、めんどいじゃん,,
109	103	*	JF095	そうだね。
110	102-2	*	JF094	後が。
111	104	*	JF095	多分ねー(うん)、掃除が大変だと<思う>{<}。
112	105	*	JF094	<そうそうそう>{>}、雨とか降ってもいやだしねー。
113	106	*	JF095	うん。

BTSJ-31（再掲）「ジャン」系の例（会話番号 208）

2.3 「ヨネ」系

話し手と聞き手が共に知っている内容を共通基盤化する際に用いられる言語形式で、2 番目に使用頻度が高かったのは 104 例中 13 例（9.3%）を占める「ヨネ」系であった[12]。内訳は、「よね」が 10 例、「よね？」が 2 例、「よねー」が 1 例である。以下に、最も多かった「よね」の一例を示す。

BTSJ-33 の直前では、聞き手（JF009）が話し手（JF010）にコンビニに関連するあるエピソードを話している。

275	253	*	JF009	でー、スリーエフのほうに行くんだけどー(うーん)、なんかねー、うん、面白いのがいろいろあんの。
276	254	*	JF009	飲み物(うん)、ペットボトルってさー(うん)、すぐ、いろんなやつ出てこない?、<お茶とか>{<}。
277	255	*	JF010	<うーん>{>}。
278	256	*	JF010	そうだね。
279	257	*	JF010	ペットボトルが一番すごいよね。
280	258	*	JF009	そう。
281	259	*	JF010	何か、ぜん、全部さー(うん)、なんかさー、「JF009あだ名」が前もってたのなんだ、なん。
282	260	*	JF010	ほらほら、あの藤原紀香がさ(うん)、バンジージャンプし、するやつ。
283	261-1	/	JF009	<あ、あのー>{<},,
284	262	*	JF010	<あのー、体>{>}ほぐす<やつ>{<}。

BTSJ-33 「ヨネ」系の例（会話番号 015）

その話の流れで、聞き手（JF009）は［スリーエフというコンビニに様々な面白いものがあり、ペットボトルの飲み物は頻繁に新商品が発売されている］という内容を話している（275 行目、276 行目）。この発話は、相手に同意を求める表現「～ない？」を用いた「いろんなやつ出てこない？」で終わっている。その後、聞き手は間髪入れずにペットボトルの飲み物の例として「お茶とか」と述べている（276 行目）。

その発言に重なる形で、話し手（JF010）が「うーん」と応じる。この「うーん」は、「うん」と異なり、聞き手の発言（ペットボトルの飲み物は頻繁に新商品が発売されている）を自身の経験と照らし合わせている時間を示していると考えられる。その後、278 行目で話し手は「そうだね」と聞き手の発言に同意し、続く 279 行目で「ペットボトルが一番すごいよね。」と述べている。聞き手も「そう。」と同意を示し、その後、話し手はペットボトルの話題で会話を展開している。

つまり、279 行目の「ペットボトルが一番すごいよね。」の「よね」は、「ペットボトルが一番すごい」という内容を共通基盤化し、その内容を基に話を発展させるために使用されているといえよう。

2.3.1 「ジャン」系・「デショ？」系と互換性がない「ヨネ」系の例

前述のような「よね」の使用が「ジャン」系や「デショ？」系と異なる点は、共通基盤化する内容がすでに相手によって語られていることである。具体的には、276 行目で聞き手が言及した［ペットボトルの飲み物は頻繁に新商品が発売されている］という内容を、話し手が 279 行目で［ペットボトルが一番すごい］という表現に変え、それを次の展開の共通基盤として利用している。

つまり、「ヨネ」系には、会話中の前の発話で話し手か聞き手によって言及され、話し手が共通基盤化する時点で既に聞き手の意識下にある（＝聞き手の記憶から想起される必要がない）共有情報を共通基盤化する用法があるということである。そして、この用法は「ヨネ」系に特有なもので、「ジャン」系や「デショ？」系には見られない。

発話連鎖の観点から終助詞を考察している西郷（Saigo 2011；西郷 2015）は、話を一歩進める価値を示す「よ」に、聞き手の同意を求める「ね」が付加された形が「よね」であると述べている。この際、話を進める価値を判断するには、その内容が聞き手にとって既知のものである必要がある。このような意味機能を持つ「よね」が、BTSJ-33 の例のように、相手の発言を基に話を展開する場面で用いられるのは、理に適っているといえる。

試しに、BTSJ-33 の 279 行目の「よね」を「じゃん」で言い換えて「ペットボトルが一番すごいじゃん。」にしたり、「でしょ？」に置き換えて「ペットボトルが一番すごいでしょ？」にすると、明らかに不自然になる。それは、「新たな認識の成立の宣

言・訴え」（蓮沼 1993, 53）という機能を持つ「じゃないか」の派生形である「じゃん」、および「話し手の想像・思考に基づく『推し量り』」（蓮沼 1993, 52）という機能を持つ「だろう」の派生形である「でしょ？」が、会話中の前の発話で既に述べられた内容を話し手が言い換える際に用いることはできないからと考えられよう。

定型表現「そうだよね」

前述のような「よね」の意味機能をより分かりやすく示す例として、一般的に同意を表すとされる代名詞「そう」と「よね」が組み合わさった「そうだよね。」が挙げられる。今回分析したデータの中でも、「そうだよね。」が共通基盤構築に使用された例が 2 例確認された。以下の BTSJ-34 はその 1 例である。

BTSJ-34 の前では、聞き手（JF092）が、風の便りで小学校時代の担任教員が性癖が原因で 2 回離婚したことを知ったという話を話し手（JF093）にしている。その行いが「先生」というイメージとかけ離れており、落ち込んだという内容である。

813	729-1	/	JF092	全然、さー(うん)、最近知り合ったそのくらいの年代の人とかが,,
814	730	*	JF093	ま、あり<がちだもんね>{く}。
815	729-2	*	JF092	<性癖がある>{>}とかって言われても、別に、“あーそうなんだ”、ぐらいじゃん。
816	731	*	JF093	あ、そうだよね、だ、2回結婚して2回別れてるくらいだから、よっぽど何かあるってことだね。
817	732	*	JF092	うーん。

BTSJ-34 「そうだよね」の例（会話番号 207）

813 行目と 815 行目で、聞き手は［その教員と同年代の人に性癖があったとしても、それほど関心はない］という内容を述べている。聞き手がこの発話を言い終わる前、より正確には文の主語に言及した直後に、話し手が重複しながら「ありがちだ」と述べている（814 行目）。文脈から、この「ありがちだ」は［その教員と同年代の人に性癖があることは珍しくない］という意味だと推測される。

この「ありがちだ」と重複しつつ、聞き手は先ほどの発話を言い終えている。その後、話し手は「あ、そうだよね」と述べている。この「あ」は、話し手が聞き手の発話を聞いて自身の「ありがちだ」という発言が若干的外れであると理解したことを表していると考えられる。また、後続する「そうだ」は「その教員と同年代の人に性癖があったとしてもそれほど関心はない」を指し、その後に「よね」が現れている。

さらに間髪入れず、話し手は［2 回離婚歴があるということは、その教員の性癖がよほどであったのだろう］という内容の発話を続けている。この流れを観察すると、

816 行目の「そうだよね」は、聞き手が先に発した内容を共通基盤化し、それを基に話を展開させるために使用されていることがわかる。この場合、「そうだよね」を「そうじゃん」や「そうでしょ？」に置き換えると、話の流れが非常に不自然になる。これは、代名詞「そう」の機能は会話中で既に言及された内容の指示（＝典型的な「言い換え」）であり、「そうだよね」の用法は、BTSJ-33 の「ペットボトルが一番すごいよね」と同様に、話し手が共通基盤化する時点で既に聞き手の意識下にある（＝聞き手の記憶から想起される必要がない）共有情報を共通基盤化することであるためである。

2.3.2 「ジャン」系・「デショ？」系と互換性を持つ「ヨネ」系

2.3.1 では「ジャン」系・「デショ？」系と互換性がない「ヨネ」系の例を見たが、「ジャン」系・「デショ？」系だけでなく、「ヨネ」系にも、話し手が共通基盤化する時点で聞き手の意識下にない共有情報を「喚起」する用法がある。そのため、以下の BTSJ-35 に現れる「よね」のように、「ジャン」系や「デショ？」系と差し替えても違和感がない「ヨネ」系も存在する。

BTSJ-35 の直前では、大学の放送系サークルに属する 2 人が、現在のサークルの番組構成に関して改善点を話し合っている。その流れで、話し手（JM013）が[よりラジオ的な要素を強くしたい]という内容を述べ、それを聞いた聞き手（JM014）は［現状はテレビでやるような内容をラジオでやっている］と指摘している。この指摘に対し、551 行目から 554 行目にかけて、話し手と聞き手の間で同意とその同意に対する理解が交互に表れている。

551	515-3	*	JM013	そうそうそうそうそう、そこ。
552	517	*	JM014	うん。
553	518	*	JM013	だよね。
554	519	*	JM014	うん。
555	520	*	JM013	おれ、もっとなんかさ、メインDJが2人いてもいいからー、アシスタントDJと(うん)メインDJがいて、そいつらのしゃべりでコーナーがあってみたいのほうが面白いよね。
556	521	*	JM014	うん。
557	522	*	JM013	“今日のゲスト解説者は…、「JM014フルネーム」さんです、どうもこんにちは”[ラジオDJのように]。
558	523	*	JM014	ふふ<笑い>。
559	524	*	JM013	“こんちは、「JM014あだ名」、あの、洋楽聞かして下さいよ”、みたいなさ。
560	525	*	JM014	<軽い笑い>。
561	526-1	/	JM013	洋楽コレクション(うん),,
562	527-1	/	JM014	あ,,
563	526-2	*	JM013	みたいなさ。

BTSJ-35 「ジャン」系・「デショ？」系と互換性がある「ヨネ」系の例（会話番号 007）

その後、555 行目で話し手は［DJ 二人のおしゃべりのコーナーがあってもいいのではないか］と意見を述べ、その内容を「よね」で共通基盤化している。続く 556 行目では、聞き手が「うん。」と同意を示し、その後、557 行目で話し手が思い描くおしゃべりコーナーを実演しながら話を展開させている。

555 行目の「よね」は、「じゃん」や「でしょ？」に言い換えても、それほど不自然さは感じられない。これは、「よね」で共通基盤化された内容が、相手の発話内容の単純な「言い換え」ではなく、故にこの時点で聞き手の意識下に新たに想起されたものだからである。具体的には、話し手が述べた［DJ 二人のおしゃべりのコーナーがあってもいいのではないか］という内容は、その前のやり取りに出てきた［よりラジオ的な要素を強くしたい］や［現状はテレビでやるような内容をラジオでやっている］という内容の言い換えではなく、それらを基にした話し手自身の提案であるということである。

DJ 二人の楽しいおしゃべりの有無がラジオ番組の良し悪しを左右する要因の一つであることに異論がある人は少ないであろう。つまり、これは「一般常識」であるが、555 行目の話し手の発話によって初めて聞き手の意識下に想起されたものである。そのため、「ヨネ」系の代わりに、「ジャン」系または「デショ？」系が現れたとしても、不自然には感じられないわけである。

今回の分析で、「ヨネ」系が共通基盤の言語形式として機能している 13 例のうち、「ジャン」系や「デショ？」系と言い換えると不自然になるものは 6 例（「そうだよね」の 2 例を含む）であり、不自然さを伴わずに言い換えが可能なものは 7 例であった。

2.4 「ノダ」と「デショ？」系・「ヨネ」系の組み合わせ

分析データには、共通基盤構築に関わる例の中で、「デショ？」系および「ヨネ」系の前に「ノダ」が現れるものが確認された。具体的には、「ノダ」の音変化を含む「ンデショ？」系（4 例 / 2.9%）と「ンダヨネ」系（8 例 / 5.7%）である。「ンデショ？」系はすべて「んでしょ？」であり、「ンダヨネ」系は「んだよね」が 7 例、「のよね」が 1 例であった。

これらを「デショ？」系や「ヨネ」系に統合する考え方もあろう。しかし、本研究の目的である日本語教育への応用を踏まえると、ある言語形式に他の言語要素が組

み合わさることで新たな意味機能が生じる場合、独立した言語形式として扱い、提示する方が学習者にとって有益であると考えられる。そのため、本稿では、西郷・清水（2022）、同（2023）と同様に、発話末の言語形式の前に「ノダ」が現れる場合は、その組み合わせを独立した 1 つの系統として分類した。

以下、「ンデショ？」系と「ンダヨネ」系の例を 1 例ずつ紹介する。

2.4.1 「ンデショ？」系

BTSJ-36 の直前では、話し手（JM003）と聞き手（JM004）が、同じサークルに所属している「人名 30」について話している。その中で、「人名 30」がサークルの打ち上げの場で金銭的な問題を理由に合宿に参加できないと述べたことを幼稚な考え方であると話し手が問題視している。

631	621	*	JM003	あいつもだって、なんだっけ、お父さんが、もう、お母さんしか働いてないんでしょ?。
632	622	*	JM004	ふん、ふん。
633	623	*	JM003	だから。
634	624	*	JM004	まーなー。
635	625	*	JM003	なんかしでかすと思ってたけど。
636	626	*	JM003	「人名1」にも怒られたし〈軽く笑い〉。
637	627	*	JM003	困った〈軽く笑いながら〉。

BTSJ-36 「ンデショ？」系の例（会話番号 002）

631 行目で、話し手が［「人名 30」の父親は働いておらず、母親だけが働いている］という内容を述べ、「んでしょ？」で発話を締めくくっている。632 行目では、聞き手が同意を表すと思われる「ふん、ふん」で応じ、その後、633 行目以降で話し手は［父親が働いていないことが原因で「人名 30」がサークル内で何か問題を起こすと予想していたこと、また、それが現実となり、現在話し手が困っている］という内容で話を展開している。この会話では、631 行目の「んでしょ？」は、［「人名 30」の父親は働いておらず、母親だけが働いている］という話し手も聞き手も知っている情報を、それ以降の会話を展開するための共通基盤にする機能を担っているといえる。

2.4.2 「ンダヨネ」系

BTSJ-37 の直前では、話し手（JM015）と聞き手（JM016）の共通の友人である「人名 1」と話し手が最近話した内容について語られている。その中で、「人名 1」に彼女ができたという噂に関して、本人がまだ心のどこかで整理がついていないことを話し手に打ち明け、それを他言しないよう頼んだことが明かされている。その後、255

行目から 262 行目までの間、二人は笑いながら話を進めている。

255	246	*	JM015	「人名5」とかにもさ(うん)<軽い笑い>、言っちゃっててさ<軽い笑い>、もうすでに(<笑い>)<笑い>。
256	247-1	/	JM016	「人名5」はな(<軽い笑い>)、ここ一番で言うからな,,
257	248	*	JM015	そう<そうそう>{<}<笑いながら><2人で笑い>。
258	247-2	*	JM016	<みたいなね>{>}<笑いながら>。
259	249	*	JM015	ちょ、ちゃんと口止め(<笑い>)しとかないと怖い んだよね。
260	250	*	JM015	なんか、前、「人名5」と2人で飲んでてさ(うん)、うん、それを、話したらさ(うん)、あの『「JM015あだ名」、みじ、みずくせーよ』とかい<笑い>。
261	251	*	JM016	うーん、おれ何にも聞いてないからー(<笑い>)。
262	252	*	JM015	「JM016あだ名」も隠してたじゃん<若干笑いながら>。
263	253	*	JM015	あ<一の、彼女のこと>{<}。
264	254	*	JM016	<あー、まあ>{>}ね。
265	255	*	JM015	うん。
266	256-1	/	JM016	隠してた<っていうか>{<},,

BTSJ-37 「ンダヨネ」系の例（会話番号 008）

255 行目で、話し手はこの内容を（この会話で聞き手に話しているだけでなく、）すでに「人名 5」にも話してしまったことを明かしている。それを聞いた聞き手は、256 行目で［「人名 5」には大事な場面で秘密を言ってしまう傾向がある］と語っている。続く 257 行目では、話し手が強い同意（「そうそうそう」）を示し、それに重ねるように、258 行目で聞き手は 256 行目の自らの発話に「みたいな」を付け加えている。この「みたいな」は、仮想的な反応を表す表現（臼田 2021）、つまり自分の主観を抑えた婉曲的な表現として機能し、256 行目の発話が持つ悪口的なニュアンスを緩和する役割を果たしていると考えられる。

259 行目では、聞き手が述べた「人名 5」の傾向を受けて、話し手は「人名 5」に［「人名 1」の秘密を口外しないよう釘を刺しておかなければ大変なことになる］という内容を述べ、その発話を「んだよね」で共通基盤化している。その後 260 行目で、話し手は「人名 5」に「人名 1」の秘密を話した時のやりとりで話を展開している。その中で、「人名 5」が他人行儀な言動を指す「水くさい」という言葉を使用したことを話し手は聞き手に明かしているが、前後の発話内容からは、この「水くさい」の対象が話し手の行動を指すのか、「人名 1」が他言しないように求めたことを指すのかは明らかではない。しかし、他人行儀な言動を好まない「人名 5」が他の人にも「人名 1」の秘密を漏らす可能性があることを、話し手は 260 行目の発話でほのめかしていると考えられる。

2.4.3 「デショ？」系・「ヨネ」系と互換性がある「ンデショ？」系・「ンダヨネ」系

次に「デショ？」系と「ンデショ？」系、そして「ヨネ」系と「ンダヨネ」系の互

換性について考察してみよう。BTSJ-36 の 631 行目の「んでしょ？」を「でしょ？」に、BTSJ-37 の 259 行目の「んだよね」を「よね」に置き換えてみてもらいたい。会話の流れに影響を及ぼすほどの意味の違いは見られないことがわかるだろう。分析データ中に現れた他の「ンデショ？」系や「ンダヨネ」系の例についても、同様の結果が確認された。このような場合に、なぜ大きな意味の違いが生じないのだろうか。

「デショ？」系や「ヨネ」系の基本的な意味機能は、聞き手に対して確認をする（春日 2021）ことである(13)。具体的には、話し手が自分と聞き手の認識が一致しているかを確かめるために使用される。一方、「ノダ」には、単に命題を提示するだけでなく、その命題に関して話し手と聞き手の間で認識の共有（安田 2012）が既に達成されている、または達成可能であるという前提を提示する役割がある。このため、「ンデショ？」系や「ンダヨネ」系は、共有済みの認識や共有可能な認識だと話し手が考えていることについて、念の為に話し手が聞き手との認識の一致を確認する際に用いられる傾向が見られる。つまり、「ノダ」を含む「ンデショ？」系や「ンダヨネ」系は、「ノダ」を含まない「デショ？」系や「ヨネ」系と比べ、話し手と聞き手の間の認識の共有をより強調する働きがあると考えられるわけである。

このように考えると、上述のような性格を持つ「ンデショ？」系・「ンダヨネ」系から「ノダ」を取り除いても、「デショ？」系・「ヨネ」系だけで十分に認識の確認が成立し、会話の流れや意味に大きな影響を与えないため、不自然さがそれほど生じないのだろう。

2.4.4 「ンデショ？」系・「ンダヨネ」系と互換性がない「デショ？」系・「ヨネ」系

一方で、「デショ？」系を「ンデショ？」系に、また「ヨネ」系を「ンダヨネ」系に置き換えることは、常に可能というわけではない。

「デショ？」系の例

まずは、BTSJ-32 で既に考察した「でしょ？」の例を取り上げて考えてみることにしよう。

387	373	*	JM001	黒板に書いた文字、消しちゃだめなんだよ。
388	374	*	JM002	なんで?。
389	375	*	JM001	あんねー(うん)、授業はー(うん)、あれ、授業ばん終わってー(うん)、で、黒板に板書残ってるでしょ?。
390	376	*	JM002	うん。
391	377	*	JM001	その板書をぱって見て、その、ろ、50分なり60分なり(うん)の授業を全部振り返れるような板書(うん)が、一番すばらしいんだって。

BTSJ-32(再掲) 「ンデショ？」系と互換性がない「デショ？」系の例（会話番号 001）

387 行目の［黒板に書いた文字は消すのはよくない］という話し手の発話に対し、388 行目で聞き手が「なんで？」とその理由を尋ねている。これに対し、話し手は 389 行目と 391 行目でその質問への回答（理由）を述べている。389 行目の最後に現れる「でしょ？」を「んでしょ？」に置き換え、「で、黒板に板書残っているんでしょ？」とすると、会話の流れが不自然に感じられるだろう。

「ンダヨネ」系の例

続いて、「ンダヨネ」系の例を見てみよう。

BTSJ-35 で既に考察した「よね」を「んだよね」に置き換えた場合を検討することにする。BTSJ-35 の直前では、大学の放送系サークルの部員の一人（JM013）がもう一人の部員（JM014）に対し、番組にラジオ的な要素をより多く取り入れたいと述べている。これに対し、聞き手（JM014）もテレビでやるような内容をラジオでやっている現状を指摘しており、そのやり取りは以下の 551 行目へとつながっている。

551	515-3	*	JM013	そうそうそうそうそう、そこ。
552	517	*	JM014	うん。
553	518	*	JM013	だよね。
554	519	*	JM014	うん。
555	520	*	JM013	おれ、もっとなんかさ、メインDJが2人いてもいいからー、アシスタントDJと(うん)メインDJがいて、そいつらのしゃべりでコーナーがあってみたいのほうが面白いよね。
556	521	*	JM014	うん。
557	522	*	JM013	“今日のゲスト解説者は…、「JM014フルネーム」さんです、どうもこんにちは”[ラジオDJのように]。
558	523	*	JM014	ふふ〈笑い〉。
559	524	*	JM013	“こんちは、「JM014あだ名」、あの、洋楽聞かして下さいよ”、みたいなさ。
560	525	*	JM014	〈軽い笑い〉。
561	526-1	/	JM013	洋楽コレクション(うん),,
562	527-1	/	JM014	あ,,
563	526-2	*	JM013	みたいなさ。

BTSJ-35(再掲) 「ンダヨネ」系と互換性がない「ヨネ」系の例（会話番号 007）

555 行目で、話し手は［DJ 二人のおしゃべりのコーナーがあってもいいのではないか］と意見を述べ、その内容を「よね」で共通基盤化している。その後、557 行目から、話し手は自身が思い描くおしゃべりコーナーを実演しながら、話を展開させてい

る。

この 555 行目の発話「そいつらのしゃべりでコーナーがあってみたいのほうが面白いよね。」の「よね」を「んだよね」に置き換え、「そいつらのしゃべりでコーナーがあってみたいのほうが面白いんだよね。」とするとどうだろうか。この場合も、「んだよね」に置き換えると、不自然さを感じる人もいるのではなかろうか。

不自然さが生まれる理由

以上の 2 つの例に見られた「デショ？」系・「ヨネ」系を「ンデショ？」系・「ンダヨネ」系に置き換えた際に生じる不自然さは、「ノダ」の存在に起因していると考えられる。聞き手との認識の共有、言い換えれば前提の存在を強調する「ノダ」が不自然さを生み出し、会話の流れを阻害しているわけである。

BTSJ-32（389 行目）の「でしょ？」は、聞き手からの質問に対する話し手の意図（[授業後に残った板書を見れば、その授業の全体像を振り返ることができる板書がよい]）に到達するための共通基盤構築に用いられている。この発話の目的は「でしょ？」によって、話し手と聞き手が認識を共有しているかどうかを確認することであるため、「ノダ」を加えて双方の認識の共有を強調することは発話の目的に相反することになる。

同様に、BTSJ-35（555 行目）では、サークルの番組にラジオ的な要素をもっと取り入れたいと考える話し手が、その具体的な提案を初めて聞き手に伝え、「よね」で聞き手が自分と同じ考えを共有しているか、または共有可能かを確認している。この「よね」の前に既に認識が共有されている状態を強調する働きを持つ「ノダ」を加えると、やはり発話の目的に相反することになってしまう。そのため、不自然さが生じてしまうと考えられる。

3. 共通基盤の内容を聞き手のみが知っている場合

話し手の共通基盤構築の意図が認められる 543 例のうち、1.8%にあたる 10 例が［共通基盤の内容を聞き手のみが知っている場合］に該当した。この 10 例では、特定の言語形式ではなく、質問形式を用いて共通基盤構築が行われている。ここで言う［聞き手のみが知っている］とは、話し手が聞き手に行う質問の答えが聞き手にしかわからない状況を指す。

このような質問形式を以下では「質問ストラテジー」と呼ぶことにする。

3.1 質問ストラテジーの分類

上述の 10 例を分析した結果、さらに以下の 4 つの下位ストラテジーに分類できることがわかった。

① 話したい対象を聞き手が知っているか聞く

話したい対象を聞き手が知っているかどうかを確認することで共通基盤を構築する（5 例）。

② 話したい対象の名称を聞く

話したい対象の名称を話し手が知らない場合に、まず聞き手にそれを尋ねて共通基盤を構築する（2 例）。

③ 話したい対象に関する聞き手の状態を聞く

話したい対象に関連する聞き手の状態を尋ねることで共通基盤を構築する（2 例）。

④ 話したい対象が以前言及されたものかどうかを聞く

話したい対象が聞き手が以前に言及していたものかどうかを尋ねて共通基盤を構築する（1 例）。

各下位ストラテジーの例数は限られているが、質問ストラテジーも日本語教育への応用において有用であると考えられる。そのため、ここでは各ストラテジーの具体例を 1 つずつ紹介する。

3.1.1 話したい対象を聞き手が知っているか聞く

BTSJ-38 の直前では、話し手（JF015）が地方から東京に遊びにやってきた従妹二人を案内し、最後に銀座でケーキのバイキングを楽しんだという話をしている。

155	139	*	JF016	うそー。
156	140	*	JF015	うん。
157	141	*	JF016	いいなー。
158	142	*	JF015	ほら、あのさー、キルフェボンって知っとる?。
159	143	*	JF016	あーあーあーあー。
160	144	*	JF015	<た####>{<}。
161	145	*	JF016	<おいしいよ>{>}ね。
162	146	*	JF015	そう、なんか、いとこがね、そこ“行きたい、行きたい”って言いよって、“キルフェボンかー”って思ったのね。
163	147	*	JF015	そして、店の名前見たらさ、“お、フラ語だ”[嬉しそうに]。
164	148	*	JF016	あーー。
165	149	*	JF015	わかったよ<笑い>。

BTSJ-38 質問ストラテジーの例 1（会話番号 018）

その後、155 行目（「うそー。」）と 157 行目（「いいなー。」）で、聞き手は銀座でケーキのバイキングをした話し手に対し羨ましさを表している。続く 158 行目では、話し手が聞き手に「キルフェボン」を知っているかどうかを尋ねている。この質問に対する聞き手の応答（159 行目「あーあーあーあー。」および 161 行目「おいしいよね。」）を受けて、話し手は従妹と一緒に「キルフェボン」というケーキ屋に行った際のエピソードを展開している。このように、話し手はこれから話したい対象について、まず聞き手が知っているかどうかを尋ねる（158 行目）ことで、話題の対象を共通基盤化していると考えられる。

ところで、話し手は、158 行目で質問をするかわりに、聞き手がその店名を知っているかどうかはお構いなしに「キルフェボンに行った」とケーキ屋の名前を出すこともできたであろう。また、話し手が聞き手はこの店を知らない可能性を考慮していた場合でも、「キルフェボンというケーキ屋」といった説明を加える形でケーキ屋の名前に言及することもできたはずである。

しかし、前者では、聞き手がキルフェボンというケーキ屋を知らなかった場合に聞き手に気まずい思いをさせたり、聞き手から質問されて話の腰を折られたりする可能性があり、一方で後者では、聞き手は「キルフェボンを知らない」（＝銀座にあるような洒落たお店には疎い）と話し手が考えていることを伝えることになってしまう。それよりも、「聞き手もキルフェボンを知っているかもしれない」と想定して、その想定が正しいかどうか確認する質問をした方が、聞き手との間に親近感を生じさせることができる。注 6 でも述べたように、共有知識を持っていると想定すること（共通基盤の想定）は、他人から好ましく思われたいという聞き手の願望を満たすことになるためである。

3.1.2 話したい対象の名称を聞く

BTSJ-39 の直前では、聞き手（JF009）がコンビニについて話し、その中でペットボトル飲料の新商品が頻繁に発売されているという話が展開されている。

279	257	*	JF010	ペットボトルが一番すごいよね。
280	258	*	JF009	そう。
281	259	*	JF010	何か、ぜん、全部さー(うん)、なんかさー、「JF009あだ名」が前もってたのなんだ、なん。
282	260	*	JF010	ほらほら、あの藤原紀香がさ(うん)、バンジージャンプし、するやつ。
283	261-1	/	JF009	<あ、あのー>{<},,
284	262	*	JF010	<あのー、体>{>}ほぐす<やつ>{<}。
285	261-2	*	JF009	<サ>{>}プリでしょ?。
286	263	*	JF010	うん。
287	264	*	JF009	うんうん。
288	265	*	JF010	あれをさ、一番最初に持ってたの、「JF009あだ名」だったもん。
289	266	*	JF009	<笑い>ほんとに。
290	267	*	JF010	すごいと思った(<笑い>)。

BTSJ-39 質問ストラテジーの例 2（会話番号 015）

話し手（JF010）は 279 行目で「ペットボトルが一番すごいよね。」と述べ、それに対し聞き手が「そう。」（280 行目）と応じている。続く 281 行目冒頭の「何か、ぜん、全部さー（うん）、なんかさー」という発言は、話し手がペットボトルについてさらに具体的な内容を話そうとしている意図を示している。しかし、話し手はその話題に関連する具体的な商品名を思い出せず、以前に聞き手が購入して持っていた商品について質問している。

話し手は聞き手からの返答を待たずに、282 行目でその商品のテレビコマーシャルについて説明し、さらに 284 行目ではその商品の機能にも言及している。それを聞いた聞き手は 285 行目で、その商品がサプリ系の商品かどうかを尋ねる。この聞き手の発言に対し、話し手は 286 行目で「うん。」と同意を示し、この時点で話し手が言及していた商品について二人の間で共通認識が確立されたといえよう。その後、288 行目以降では、その商品を含むペットボトル飲料のサプリ系商品の話題へと展開している。

以上の会話の流れから、話し手は［ペットボトルがすごい］（279 行目）と思う具体例を述べようとしたが、話題にする対象物の商品名を思い出せなかったため、281 行目から 284 行目では、聞き手に商品名を聞く質問をして対象物を共通基盤化しようとしたと考えられる。

3.1.3 話したい対象に関する聞き手の状態を聞く

以下の BTSJ-40 は、話し手が話したい対象について、聞き手の現在の状態を先に

確認することで、その対象物を共通基盤化している例である。話し手（JM013）と聞き手（JM014）は、以前行われた留学説明会について話している。このやりとりから、両者が説明会で使用された資料を持っている一方で、聞き手のみがその説明会に参加していたことがわかる。

24	22	*	JM013	そうそう、留学生のさ(あ、あ)、あったじゃん。
25	23	*	JM014	あんあん。
26	24	*	JM013	あれさ、せ、説明聞いた?、お前。
27	25	*	JM014	うまい具合に話題作ったね<軽い笑い>。
28	26	*	JM013	<大きな笑い>お前は、だって<笑いながら>、普通に聞きたかったの、この話は。
29	27	*	JM014	あ、そうなの<軽く笑いながら>。
30	28	*	JM013	留(あん)学の(あん)、あれ、おま、あれ分かる?。
31	29	*	JM014	何が?。
32	30	*	JM013	あれだけ見て[↓]。
33	31	*	JM014	全然分か<んないよ>{<}。
34	32	*	JM013	<<笑い>分かん>{>}ないよね<笑いながら>。
35	33-1	/	JM014	<つか>{<},,
36	34	*	JM013	<説>{>}明で何か言ってた?。
37	33-2	/	JM014	<せつ>{<},,
38	35	*	JM013	<日本>{>}語だろ?。

BTSJ-40 質問ストラテジーの例 3（会話番号 007）

24 行目と 26 行目で、話し手は聞き手に対し、留学説明会に参加したかどうかを尋ねている。これに対し、27 行目で聞き手は「うまい具合に話題を作ったね〈軽い笑い〉。」と反応している。この発言の背景には、会話の録音を調査のために依頼されたものの、何を話せばよいのかわからない中で、話し手が突然話題を持ち出してきたことがある。28 行目で話し手は［無理やり話題を絞り出したわけではなく、本当に聞きたかったことだ］という趣旨の返答をし、29 行目で聞き手は軽く笑いながら「あ、そうなの。」と理解を示している。

その後、話し手は 26 行目の話を再開し、30 行目と 32 行目で[配布された留学資料だけで内容が理解できるかどうか]を聞き手に尋ねている。この問いに対し、33 行目で聞き手は「全然分かんないよ。」と答えている。この返答を受け、話し手も理解できていないことを表明し、その後、聞き手が参加した説明会で得た情報について複数の質問をすることで話を展開している。

以上の会話の流れから、このストラテジーは、話し手が話したい対象について、聞き手の現在の状態や状況を確認することで共通基盤を構築し、その後の話題展開の土台を作る役割を果たしているといえよう。

3.1.4 話したい対象が以前言及されたものかどうかを聞く

BTSJ-41 は、話し手（JF095）と聞き手（JF094）がキャンプ場について話している会話である。13 行目の話し手の発話と 14 行目の聞き手の発話から、二人が以前にキャンプ場について話していたことがわかる。

11	11	*	JF095	キャンプあのねー、キャンプをねー昨日調べてたの。
12	12	*	JF094	うん。
13	13	*	JF095	え、「JF094愛称」ちゃんが言ってたのって何キャンプ場?。
14	14	*	JF094	あたし言ってたのはね、『ふれあいの村』とか。
15	15	*	JF095	ちがうなんかね。
16	16	*	JF094	うん。
17	17	*	JF095	《沈黙2秒》あら、あたらしいと?。
18	18	*	JF095	なんて読むんだろう。
19	19	*	JF094	新渡戸稲造の『ニト』?。
20	20	*	JF095	そうかな?〈笑い〉。
21	21	*	JF095	新渡戸稲造の、『ニト』?〈笑いながら〉。
22	22	*	JF094	なにを?、新しい戸でしょ?。
23	23	*	JF094	そう、新渡戸の『ニト』。
24	24	*	JF095	『ベ』はなに?。

BTSJ-41 質問ストラテジーの例 4（会話番号 208）

11 行目で話し手が前日にキャンプ場について調べたことを聞き手に伝えている。12 行目で聞き手があいづち（「うん。」）を返した後、13 行目で話し手は、聞き手が以前話していたキャンプ場がどこかを質問している。これに対し、14 行目で聞き手は「あたし言ってたのはね、『ふれあいの村』とか。」と答えている。

この答えを受けて、15 行目で話し手は、前日に調べていたキャンプ場が「ふれあいの村」ではないことに気づく。その後、17 行目以降では、話し手が前日に調べていたキャンプ場の漢字の読み方やその場所について話を展開している。

このストラテジーでは、話し手が話題にしようとしている対象が聞き手によって以前に言及されたものかどうかを確認することで、共通基盤を構築している。実際には聞き手が以前に言及していたキャンプ場は話し手が話題に挙げたいキャンプ場ではなかったが、聞き手の過去の発言を確認することで、話し手は新たな話題をスムーズに展開することを可能にしていることがわかるだろう。

4. おわりに

本研究では、日本語母語話者が雑談において聞き手との間にどのように共通基盤を構築しているのかを、『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2020 年度版』を用いて詳細に分析した。特に、［共通基盤の内容を話し手と聞き手が

共に知っている場合]、または[聞き手のみが知っている(と話し手が推察する)場合]に焦点を当て、それぞれの状況で使用される言語形式やストラテジーの特徴を明らかにした。

その結果、[共通基盤の内容を話し手と聞き手が共に知っている場合]においては、主に「ジャン」系、「ヨネ」系、「デショ？」系といった言語形式が使われていることが確認された。また、認識の共有を強調する形式(「ンデショ？」系・「ンダヨネ」系)と、単に認識の一致を確認する形式(「デショ？」系・「ヨネ」系)との機能的な違いが会話の流れに及ぼす影響についても考察を行った。

さらに、[共通基盤の内容を聞き手のみが知っている場合]においては、聞き手への質問を通じて共通基盤を構築する「質問ストラテジー」が用いられ、この「質問ストラテジー」には、聞き手が対象に関する情報を知っているかを尋ねるだけでなく、以前に言及された内容を確認したり、聞き手の状況を把握したりするなど、多様な方法が存在することがわかった。

本研究が明らかにした知見は、日本語教育において学習者が自然な会話を展開するための指導法や教材設計に活用できると思われる。例えば、共通基盤を構築する際の具体的な言語形式の使い分けや、質問形式を用いた共通基盤構築の実践的な例を教材に組み込むことで、雑談に参加する学習者が主体的に会話の流れをコントローする力を身に付けることが期待できよう。

今後の課題としては、現実の接触場面において日本語学習者がこれらの言語形式やストラテジーをどのように使用しているのかを探ることが挙げられる。こうした分析を通して、雑談において自然に会話を発展させるのに不可欠な共通基盤の構築を行う際に日本語学習者がどのような点に困難を抱えているのかを明らかにすることができよう。このような研究の知見を地道に積み重ねていけば、日本語母語話者との日々の何気ない会話を心から楽しむことができる日本語学習者を増やすことに貢献できるのではないかと考える。

注

(1) 小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計が100%になっていない。

(2) 「ではない(か)」を語源(大山2023)とするこの「じゃん」については、「東京方言」(松丸2001, 33)、「首都圏で用いられている話し言葉」(松田2011, 193)など使用

される地域に関連付けられる記述が見られる。しかし、本研究では「じゃん」は若い世代を中心に全国の広範囲で使用されている（大山 2023）ものと考える。

(3) 「やん」は関西を中心に使用されていると言われている（鳥谷 2024）。しかし、本研究で使用した会話データには会話参与者の出身に関する情報が含まれていないため、この点については考察を行わないこととする。

(4) 談話の中での「だろう」「じゃないか」の機能について研究を行った蓮沼（1993）は、これらの表現に共通する機能として「共通認識の喚起」を挙げており、「聞き手が共有すると見込まれる認識・知識について，話し手が聞き手に注意を喚起したり，思い出させたりし，それを呼び起こすといった用法である」（p. 41）と述べている。本研究の文脈においてこの議論を適用すると、次に話す内容を下準備として聞き手との間に共通基盤を構築するために、共通認識を喚起する必要があるといえよう。

(5) 本稿は、西郷・清水（2023）の続編であるため、図の番号は同稿からの通し番号を用いることとする。

「BTSJ-」の後ろに現れる数字は本研究のための通し番号であり、『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2020 年度版』とはなんら関係がない。また、「BTSJ-」データ内には列（カラム）が 5 つあるが、それぞれの列は左から「ライン番号」「発話文番号」「発話文終」「話者」「発話内容」を表している。詳細は『基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese: BTSJ）2019 年改訂版』を参照されたい（本ファイルは、https://isplad.jp/lab/wp-content/uploads/2020/01/BTSJ2019.pdf からダウンロードが可能）。

また「BTSJ-（連番）」データ内の会話文の中で、話し手が聞き手との間に共通基盤を構築しようとする意図が認められる言語形式・ストラテジーを蛍光ペン（カラー版は緑色）でマークした（西郷・清水（2022）、同（2023）と同様に、本稿では、共通基盤を構築しようとしている会話参与者を「話し手」、その他の会話参与者を「聞き手」と呼ぶことにする）。さらに、蛍光ペンでマークした言語形式・ストラテジーの周りに 2 つの顔が左右に並んでいるシンボルを付した。左側の顔は聞き手を、右側の顔は話し手を表している。塗りつぶされている顔（カラー版は赤色）は、共通基盤の内容を知っていることを表す。具体的には、［共通基盤の内容を話し手と聞き手が共に知っている場合］は両方の顔が塗りつぶされており、［共通基盤の内容を聞き手のみが知っている場合］は、左側の聞き手の顔のみが塗りつぶされている（「BTSJ-（連番）」データの見方に関する詳細な説明は、西郷・清水（2022）を参照されたい）。

(6) Brown & Levinson（1987）が提唱したポライトネス理論では、positive politeness strategies（他人から好ましく思われたいという聞き手の願望を満たすためのコミュニケーション方略）の一つとして「共通基盤を想定、喚起、主張せよ」が挙げられている。

(7) 蓮沼（1993）は、注 4 で紹介した「共通認識の喚起」を 5 つに分類している。その中の１つである「共通判断の喚起」（p. 47）（「一般知識や，状況から推論すれば、聞き手も自分と同様の認識・判断が可能だという見込みに基づき、聞き手にその共有を喚起する用

法」(p. 47)) が、本稿の分類である「論理的な帰結」の中の「主観的帰結」に当たると考えられる。また、本稿の「一般常識」及び「共有情報」という分類は、蓮沼 (1993) では、「既有の共通知識の喚起」(p. 47) (「話し手・聞き手が共有する既有知識の中にある事態やその要素について、聞き手に思い出させる用法で、それを談話の話題として導入するような場合に用いられる。一般知識や，二人の共通経験から知識を呼び出す...」(p. 47)) に当たると考えられる。

(8) 水谷 (1983) が指摘した日本語特有の「共話」という会話スタイルは、黒崎 (1995) によって、①先取り型、②補足型、③助け舟型、④言い換え型、⑤共感型の 5 つに分類されている。BTSJ-31 の 111 行目に現れている JF095 の発話は、このうち②補足型に該当すると考えられる。

(9) 「でしょ？」の元の形である「でしょう」には、推量と確認の用法があるとされている (庵 2009)。庵 (2009) は、コーパスの分析結果をもとに、話し言葉における主な用法は確認であるにも関わらず、初級レベルでは推量の用法しか教えられていない現状を指摘している。本研究で扱う共通基盤構築に用いられる「でしょ？」は、確認用法の下位分類に属すると考えられるが、日本語レベルを問わず、これを取り上げている市販の教材は皆無に等しいのが現状である。

(10) 権 (2018) は、「だろう」「でしょう」には聞き手の再認識を促す働きがあると指摘し、その働きを 3 つに分類して説明している。その中の 1 つである、話し手が対話を円滑に始めるために聞き手の知識や記憶を喚起するという働きは、本研究テーマと関連性が非常に高い。

(11) だからと言って、「デショ？」系と「ジャン」系の意味機能に全く違いがないとは言えないであろう。蓮沼 (1993) は、「でしょ？」の原形である「だろう」と、「じゃん」の原形である「じゃないか」が認識喚起という点では同じ機能を持ちながらも、本質的には異なる機能を有していると論じている。その中で、「だろう」の本質的な機能は「話し手の想像・思考に基づく『推し量り』」(p. 52) であり、一方の「じゃないか」は「新たな認識の成立の宣言・訴え」(p. 53) であると述べている。こうした聞き手に対する問いかけの態度の違いが、「デショ？」系と「ジャン」系の使い分けの一因となっている可能性があるのではなかろうか。

(12) 西郷 (2011) は、終助詞「よね」について、日常会話で頻繁に使用される一方、「ね」や「よ」と異なり、学習者用の日本語市販教材では学習項目としてほとんど取り上げられていないと指摘している。その理由の一つとして、学習者向けの解説に十分耐えうる意味機能がまだ解明されていない点を挙げている。「よね」は、「ね」や「よ」と同様に語彙的な意味を持たず、話し手の伝達態度にかかわる言語要素であるため、その意味機能を正確に捉えるのは容易ではない。特に、文レベルでの考察には限界があると考えられる。本研究のように、伝達態度が生成される会話の文脈、すなわち談話レベルにおいて、「よね」がどのように機能しているか、さらに具体的には、何のために使われているのかを分析することによって、これまで不明瞭だった意味機能の解明が期待される。それによ

り、日本語学習者向け文法解説の質的向上にも寄与する可能性が高まると考えられる。

(13) 本稿のテーマである共通基盤の構築を直接扱ったものではないが、談話における「でしょう」と「よね」の機能の相違点について論じている研究に Nazikian（2018）がある。その中で、Nazikian は「でしょう」は、話し手が聞き手に対して話し手の視点を支持することを期待したり、話し手自身の立場を正当化したりする際に使用され、一方の「よね」は、話し手が自分と聞き手との間に認識の差異を想定しつつ、共感を示すために用いられると論じている。

参考文献

庵功雄 (2009)「推量の「でしょう」に関する一考察－日本語教育文法の視点から－」『日本語教育』 142 号, 日本語教育学会, 58-68.

臼田泰如（2021)「態度をほのめかす例示 : 日本語引用表現『みたいな』の分析」『国立国語研究所論集』 第 20 号, 国立国語研究所, 149-169.

大山隆子（2023)「『じゃん』の統語的特徴と語用論的機能」『国語国文研究』 第 160 号, 北海道大学国語国文学会, 17-30.

春日悠生（2021)『日本語終助詞・文末表現の意味記述 : 発話行為・相互行為の観点から』 京都大学大学院人間・環境学研究科博士論文

黒崎良昭（1995)「日本語のコミュニケーション--『共話』について」『園田学園女子大学論文集』 第 30 号 1 巻, 園田学園女子大学論文集編集委員会, 45-60.

権城（2018)「推測表現の語用論的な用法の日韓対照研究－『だろう／はずだ／かもしれない』を中心に」『日本語文學』第 77 輯, 韓国日本語文学会, 33-52.

西郷英樹（2011)「日本語教科書での終助詞「よね」の扱いに関する一考察」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』第 21 号, 関西外国語大学留学生別科, 89-114.

西郷英樹 (2015)「プロフィシェンシーと「ね」「よ」」鎌田修・嶋田和子・堤良一（編）『プロフィシェンシーを育てる 3 談話とプロフィシェンシー』, 凡人社, 112-145.

西郷英樹・清水崇文（2022)「雑談で話し手はどのように聞き手との間に共通基盤を構築しているか（1)」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』 第 32 号, 関西外国語大学留学生別科, 43-72.

西郷英樹・清水崇文（2023)「雑談で話し手はどのように聞き手との間に共通基盤を構築しているか（2)」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』 第 33 号, 関西外国語大学留学生別科, 1-18.

鳥谷善史（2024)「関西若年層の否定形式「～ヤン」その後:その流入と流入後の伝播

状況」『山邊道 : 国文学研究誌』 第 64 號, 天理大学国語国文学会, 1-28.
蓮沼昭子（1993）「日本語の談話マーカー『だろう』と『じゃないか』の機能－共通認識喚起の用法を中心に－」『第 1 回小出記念日本語教育研究会論文集』, 小出記念日本語教育研究会, 39-58
松田斉紀（2011）「話し言葉における「じゃん」について - 首都圏に暮らす 10 代の使用実態 - 」『思言』No.7, 東京外国語大学大学院総合国際学研究科, 193-200.
松丸真大（2001）「東京方言のジャンについて」『阪大社会言語学研究ノート』 第 3 号, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室, 33-48.
水谷信子（1983）「あいづちと応答」 水谷修（編）『講座日本語の表現（3） 話しことばの表現』筑摩書房, 37-44.
安田崇裕（2012）「従属節におけるノダの機能」『研究論集』 第 12 巻, 北海道大学大学院文学研究科, 189-207.
Brown, P., & Levinson, S, C. (1987). *Politeness*: *Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
Nazikian, F. (2018). Role of *yone* and *deshoo* in the Construction of Social Actions: From an Epistemic and Affective Point of View. *NINJAL Research Papers*, Vol.16, 35-50, National Institute for Japanese Language and Linguistics.
Saigo, H. (2011). *The Japanese Sentence-final Particles in Talk-in-Interaction*. Amsterdam: John Benjamins.

使用コーパス

宇佐美まゆみ監修（2020）『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2020 年版』、国立国語研究所、機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」、サブ・プロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」（リーダー：宇佐美まゆみ）

謝辞

本研究は JSPS 科学研究費補助金・基盤研究(C)・JP20K00714「雑談での聞き手との共通基盤構築に関わる表現・ストラテジーに関する調査とその応用」の成果の一部である。

(hsaigo@kansaigaidai.ac.jp)
(takafu-s@sophia.ac.jp)